
コース名：授業で使う学習メディアを制作する

(後藤幸子)

対 象：看護系大学の助手教官

目 標：授業で使いたい学習メディアを制作する

研修時間：夏期休業で短期集中、週1回ペースで5日間（約40時間程度）

形 態：個人学習・グループ学習・報告会

研修内容：

1. 導入

2. 研修形態

- (1) 授業目標の決定に向けて教示及び討議
- (2) 授業設計（指導細案教授方略など作成）
- (3) 既存メディアの検索・検討
- (4) 教授メディアの検討（メディアの種類、特性など）
- (5) 資料・素材の検討（情報源・入手方法など）
- (6) 教授メディアの選定
- (7) メディア制作の企画・設計
- (8) 資料・素材の収集、素材の決定
- (9) 制作機器の準備・スタッフの編成
- (10) メディアの制作（グループ又は個人）
- (11) メディアの評価
- (12) メディアの登録・教材データベースなど多くの教授者が利用

*ここまで高度なものはできないと思います。一応リストしました。

研修方法：

研修会の意図、プログラムについて、
具体的な進め方、講義
講義と演習・討論

研修評価の観点：

- ・看護大学におけるメディア環境を点検する
- ・授業におけるメディア利用を振り返る
 - 学習メディアとは
 - 学習メディアの種類
 - 学習メディアの特性
 - 学習とメディア
- ・教材と教師の関係について考える

ラショナル：

現在の看護系大学の助手教官は、一般に学士卒または修士・博士卒と多岐である。即ち、研究者としてはある程度自立していると言えるが、教育者としてのトレーニングの場はなく不十分である。講師や教授といった上司の講義を聴講しつつ、自己の教育スキルを培っているのが実情である。助手時代に講義を持つことは殆ど皆無であるため、講師となって初めて授業設計を立案し、教授方法や教材作成などに翻弄し苦勞をしていると言えよう。いずれは講義を担当

することであり、助手時代にこそ教授スキルについて学ぶことは非常に重要であると考える。

そこで、この研修プログラムでは、授業のシミュレーションを描き、授業デザインの方法の1つである学習環境とメディアについて考えることを通しながら、自己の授業で使う学習メディアを、楽しみながら制作にチャレンジすることをねらいとしたい。

なお、ここでのメディア作成とは、実物やモデル、教育機器の場合は難しいので、VTR、スライド、TPシート、印刷物、コンピュータなどを駆使した視聴覚教材を制作することである。こうした自主教材には、教師の手作りに対する親しみ、つまり学習活動に引きつけうる強力な働きをする心理的効果が期待でき、教材と教師の関係について考える機会ともなる。

参考文献：

カールR. ロジャーズ、伊東博（監訳）：自由の教室、新・創造への教育1岩崎学術出版社、1984

藤岡完治：一時限一時限を活かす工夫ー授業で活かしたい技術のいろいろ、「指導と評価」VOL.35No.4 日本教育評価研究会

備 考：

本年4月の異動で赴任先の教育・学習環境が分からないこと、助手教官の教育レジネス、参加意識などの情報がない。まず学内の助手教官と共に資質を高めるべく、研修ができればと考えています。規模は本学教官15名の助手に参加を募り、少なくとも4名以上を対象に展開したい。
